

(問題は次のページから始まる)

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

二十世紀は、「わかる」が当然の時代だった。自分はわからなくても、どこかに「正解」はある——人はそのように思っていた。既にその「正解」はどこかにあるのだから、恥ずかしいのだとしたら、その「正解」を知らないでいることが恥ずかしいのであり、「正解」が存在することを知らないでいることが恥ずかしかったのである。だから、人は競って大学へ行ったり、子供達を競わせて大学に行かせた。ビジネスの理論書を必死になって読み漁^{あさ}ったし、誰よりも早く「⁽⁷⁾センタンの理論」を知りたがった。それをするのと、現実生きる自分達が知らないままにいる「正解」を手に入れることとは、イコールだと思っていたのである。

(a)、大学へ行くことを当たり前にして、多くの日本人は、大学がそうたいしたものではないという幻滅に訪^あられた。しかし、それは果たして、「日本の大学がたいしたものではないから」なのか、あるいはまた、日本の大学に「自分達の思い込みをなんとかしてくれるだけの万能性がなかったから」なのかはわからない。だからこそ、「日本の大学はたいしたものではない」と思ってしまった人達の中には、「外国の大学だったらまた別かもしれない」という思い込みだつて生まれる。外国の大学へ行くには金がかかる。「それだけの金がかかる以上、外国の大学にあるものは『本物』であるはずだ」という思い込みだつて生まれる。外国の大学には外国の大学なりのよさとすごさはある。しかし、それと「外国の大学だからすごい」という思い込みとは、別である。それが、「自分達の知らない世界にはまだすごいものがあつて、そこには『正解』があるはずだ」と思い込んだ結果なら、外国の大学だと、「どうつてことはない」のである。

たとえばまた、大学を出て社会人になり、しばらくして壁にぶち当たることがある。その時に、「会社を辞めて大学に入り直そう」という決断をする人もいる。それは、あるいは必要なことかもしれない。(1)。しかし、もしかしたらそれは、錯覚かもしれない。「社会に出て未熟な自分のメッキが剥^はげた」という事実があるのなら、その未熟さは、自分で「コク⁽⁸⁾フクしなければならぬ」。そのコク⁽⁸⁾フク手段が「大学に入って学び直せばなんとかなる」であるのは、もしかしたら、短絡かもしれない。この人が、「自分は正解から離れた。大学には正解がある。その正解に近づけば、もう一度成功を取り戻すことができる」と思い込んでいたのだとしたら、この人のあり方は、「どこかに自分の知らない正解はある」と思い込んでいた二十世紀病なのである。

二十世紀は、イデオロギーの時代であり、X だった。「その『正解である理論』をマスターしてきちんと実践できたら、す

べてはうまく行く」—そういう思い込みが、世界全体に広がっていた。そういう状況の中では、「自分の現実をなんとかしてくれる
「正解」はどこかにある」という考え方もたやすく生まれるだろう。その人達は学習好きになって、次から次へと「理論」を漁る。一
つの理論がだめになったら、もう一つ別のナントカ理論へと走る。思想さえもが流行になったら、その後では、「流行」さえもが思想
である。「それを知らなかったら、時代からおいてきぼりを食らわされる」—そういう不安感の下では、流行もたやすく思想になり、
であればこそ、二十世紀末には、わけのわからない「宗教もどき」がさまざまな事件を引き起こしました。

「理論の合理性を求めて、どうして人は宗教という超理論へ走ってしまうのか？」—二十世紀末の「宗教もどき」が引き起こした
⁽⁷⁾サンゲキに対して、多くの人達はこのように首をひねった。(2)しかし、その求められた「理論」が、「なんでも解決してくれ
る万能の正解」と一つだったとしたら、この矛盾はたやすく解決されるだろう。「なんでも解決してくれる万能の正解」は幻想であり、
これはそもそも宗教的なものだからだ。

二十世紀は理論の時代で、「自分の知らない正解がどこかにあるはず」と多くの人は思い込んだが、これは「二十世紀病」と言われ
てしかるべきものだろう。「どこかに「正解」はある」と思い、「これが「正解」だ」と確信したら、その学習と実践に一路邁進する。
二十世紀のそのはじめには社会主義があつて、これをこそ「正しい」と思った人達は、これを熱心に学習し実践しようとした。(b)
そこにさまざまな理論が登場して、第二次世界大戦後の二、三十年間は、「二世を風靡したナントカ理論」の花盛りとなる。そこで激
化したのは、子供の進学競争ばかりではない。大人だとてやはり、やたら学習意欲で猪突猛進をしていたのである。

学習—つまりは、「既に明らかにしているはずの「正解」の存在を信じ、それを我が物としてマスターしていく」である。ここで
は、「正解」に対する疑問はタブーだった。それが「正解」であることを信じて熱心に学習することだけが正しく、その「正解」に対
する疑問が生まれたら、「新しい正解を内含している(はずの)新理論」へと走る—これが一般的な方だった。

(3) やがては、なにがなんだかわからない「混迷の時代」となって、そこに訪れるのが、「正解である可能性を含んでいる(は
ずの)情報をキャッチしなければならぬ」という、情報社会である。

どこかに「正解」はあるはずなのだから、それを教えてくれる「情報」を捕まえないならぬ—そのような思い込みがあつて、
二十世紀末の情報社会は生まれるのだが、それがどれほど役に立つものかはわからない。しかし、「正解」につながる(はずの)情
報を仕入れ続けなければ脱落者になってしまう」という思い込みが、一方にはある。だから、それをし続けなければならない。それを

し続けることによって得ることができるのは、「自分もまた『正解はどこかにある』と信じ込んでいる二十世紀人の一人である」という一体感だけである。だからこそ、情報社会の裏側では、得体の知れない（甲）もまた、同時進行でひっそりと広がって行く。情報社会でなにを手に入れられるのかは知らないが、情報社会の一員にならなければ、情報社会から脱落した結果の孤独を味わわなければならぬからである。

そもそも「恥の社会」である日本に、「自分の知らない『正解』がどこかにあるはず」という二十世紀病が重なってしまった。その結果、「わからない＝恥」は、日本社会に抜きがたく確固としてしまったのである。

（c）、その二十世紀は終わってしまった。終わって行く二十世紀には、「もしかしたらもう『正解』はないのかもしれない……」という不安感が漂っていた。どこにも「画期的な新理論」はない。理論の代用物でもあった「画期的なヒット商品」もない。パソコンやインターネットが画期的であったとしても、それがどこまで必要なかはわからない。なぜかと言えば、その『必要』は、「どこかに正解があるはず」という、二十世紀的な思い込みの上に存在するものだからである。

（4）よく考えてみればわかることだが、「なんでもかんでも一挙に解決してくれる便利な『正解』」などというものは、そもそも幻想の中にしか存在しないものである。「二十世紀が終わると同時に、幻滅もやって来た」と思う人は多いが、これもまた二十世紀病の一種である。二十世紀が終わると同時にやって来たのは、「幻滅」ではなく、ただの「現実」なのだ。

人はこまめに挫折を繰り返す。一度手に入れただけの自信は、（乙）役立たずになり変わる。人はたんびたんびに「わからない」に直面して、その疑問を自分の頭で解いていくしかない——これは、人類史を貫く不変の真理なのである。自分がぶち当たった壁や疑問は、自分オリジナルの挫折であり疑問である。「万能の正解」という便利なものがなくなってしまった結果なのではない。それを「幻滅」と言うのなら、それは、「なんでも他人まかせですませておける」と思い込んでいた、^{〔ロ〕}ブショウ者の幻滅なのである。

二十世紀に定着してしまったものは「個人の自由」だが、そこから生まれるのは、「自分の挫折は自分オリジナルの挫折である」と言い切る権利である。「自分オリジナルの挫折」は、結局のところ、自分で切り開くしかないものなのである。

二十世紀が終わって、人間は再び過去の^{〔ハ〕}ジゲンに戻った。（5）そこでは、困難を切り開くものは、常に「自分の力」だった。「自分の力」がふるえるようになる前に、「どうしたらいいのかわからない、なにがなんだかわからない」という混乱に呑み込まれても不思議ではない。人類は常に、そういうところからスタートしてきたのである。

「わからない」は、あなた一人の恥ではない。恥だとしたら、「この世のどこかに『万能の正解』がある」とばかり信じて、簡単に挫折しうる「自分自身の特性」を認めないことが恥なのである。「特性」がいいものだとはい限らない。

「どこにも正解はない」という『混迷』の中で二十世紀は終わり、その『混迷』の中で二十一世紀がやって来た—そう思ってしまったら、もう二十一世紀は終わりだろう。「わかる」からスタートしたものが、「わからない」のゴールにたどり着いてしまった。これが間違いであるのは、既に言った通りで、であればこそ二十一世紀は、人類の前に再び訪れた、「わからない」をスタート地点とする、いとも当たり前の時代なのである。

(出典 橋本治『「わからない」という方法』より)

※出典の文章は一部を省略している。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア)

1

(イ)

2

(ウ)

3

(エ)

4

(オ)

5

- | | | | | | | |
|-----|------|----|----|----|----|----|
| (ア) | センタン | ①短 | ②淡 | ③端 | ④単 | ⑤嘆 |
| (イ) | コクフク | ①刻 | ②克 | ③酷 | ④剋 | ⑤告 |
| (ウ) | サンゲキ | ①酸 | ②産 | ③参 | ④賛 | ⑤惨 |
| (エ) | ブシヨウ | ①省 | ②小 | ③賞 | ④精 | ⑤将 |
| (オ) | ジゲン | ①現 | ②元 | ③原 | ④源 | ⑤幻 |

- 問二 本文中の（ a ）（ c ）に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は（ a ）、（ b ）、（ c ）
- ① やがて ② たとえば ③ 一方 ④ しかし ⑤ だから

問三 空欄（甲）、（乙）を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。
解答番号は（甲）、（乙）

（甲）

- ① 抵抗感 ② 不満感 ③ 孤独感 ④ 透明感 ⑤ 一体感

（乙）

- ① たやすく ② 目ざとく ③ ともかく ④ なにげなく ⑤ 惜しげもなく

問四 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

- ① 未来を否定的に捉える憂慮の時代
② 進歩を前提とする理論の時代
③ 過去の教訓を重視する回顧の時代
④ 現在と未来との融合の時代
⑤ 現実を重視する実践の時代

問五 次の一文は、本文中の(1)～(5)のどこに入れるのが最も適当か、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 12

「どこかに『正解』はあるはずだ」という確信は動かぬまま、理論から理論へと走って、理論を漁ることは流行となり、流行は思想となる。

- ① (1) ② (2) ③ (3) ④ (4) ⑤ (5)

問六 傍線部A「大人だとしてやはり、やたら学習意欲で猪突猛進をしていたのである。」なのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 13

- ① 自ら考えて問題解決に必要な「正解」を導く必要があるから。
② 求める「正解」が既に存在していることを信じていたから。
③ 情報社会で生き延びていくために、新たな知識を学ぶ必要があるから。
④ 正解と確信した事柄の学習とその実践によって問題が解決できるから。
⑤ 最新の理論を理解していないと、変化に富む現代から取り残されるから。

問七 傍線部B「これもまた二十世紀病の一種である」の意味に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は

14

- ① ビジネスの理論書を読み漁り、その上で試行錯誤を通じて自らが直面している問題の正解を導こうとすること。
- ② 日本の大学や外国の大学に入学して学びなおして自ら直面する問題の正解を見つけることを、学費の負担などの金銭的な理由であきらめること。
- ③ インターネットを通じて様々な情報を入手して、それらの情報を組み合わせることで自らの直面する問題に対する解決策を導こうとすること。
- ④ 自らの挫折や疑問に「幻滅」を見ることは、それらの挫折や疑問に対する「正解」がどこかに探せば見つかるという他人まかせの姿勢でいるということ。
- ⑤ 日常生活の中で直面する数々の壁や挫折を消極的に捉えた上で、問題解決を一切放棄し、先送りすること。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

15

- ① 二十世紀においては、自らのわからないことに対する「正解」は、日本の大学よりも外国の大学で学びなおすことで必ず見つけることが出来た。
- ② 二十世紀においては、現実に生きる自分達が知らないままにいる「正解」をみつけるために、自らの頭で考え抜くことが積極的に支持されていた。
- ③ 二十一世紀においては、自ら直面する問題を解決するための「正解」は、自らが探さなくてもどこかに探せば存在する時代であるといえる。
- ④ 二十一世紀においては、自ら直面する問題を解決するために、情報社会の発達を背景に、時間や空間を超越した多様な情報を入手することが重要である。
- ⑤ 二十一世紀においては、自ら直面した疑問や挫折を解決するためには、自らの特性を踏まえ、自らが考えて正解を見つけ、切り開いていくことが求められる。

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ここでまったく関係ないと思われるかも知れないが、宗教と科学の問題について考えてみたい。

まず科学についてであるが、村上陽一郎が『近代科学を超えて』（日本経済新聞社）に意をつくして論じているように、「科学を、経験に基づかない概念や原因、あるいはそれと気づかれないが」アンモクに（インプリシットに）潜んでいる信念などの前提なしに、ひたすら「事実」のみから構築しようとするなど、およそ不可能である」ことを、まずわれわれは認識しなくてはならない。村上が多く例をあげて論じているように、自然科学の法則は「臆断」によって見出される、と言っている。事実を熱心に収集して、それによって法則が見つかることはない、と言ってもいい。そもそも事実と言っても無限にあるのに、そのなかのどれを「収集」するかというときに、「臆断」が先行しているのだ。

ヨーロッパにおいてのみ近代科学が生まれてきた事実の背後には、それに必要な「臆断」を持ちやすい母胎として、キリスト教があったことを認めるべきだと思う。この世は神が創り賜うたのだから、それは単純にして明快な法則によって秩序だてられているはずである、という「臆断」は、ニュートンをはじめ当時の科学者が自然現象を研究する際の強い支えとなった。日本にキリスト教を広めようとした西洋の神父たちが、自然科学を説得のための武器としようとしたことは、この事実を裏づけるものである。

多神教や汎神教の国々においては、自然現象についての部分的理解は、相当に進んでいたとも言える。ジョセフ・ニーダムが精力的に明らかにしたように、中国においては個々の事実としては、西洋よりはるかに早く科学的な発見をしていたこともあった。しかし、それらを、^Aたとえば物理学のようにひとつの「体系」にまとめる、あるいは、極めて普遍的で明快な法則によって説明する、という意志を持たなかった。ここにヨーロッパとの大きい差がある。

次にキリスト教において重要なことは、神と人間、人間と他の被造物の間に明確な切断があることである。近代科学の成立の前提として、^B現象とその現象を研究する観察者の間に明確な切断があることは、よく指摘されることである。この方法によって、自然科学は「普遍的」な法則を見出すことが可能になったし、名人芸に頼らない「技術」と組み合わせることが容易になったのである。

このような「切断」は、人間の内界と外界、物と心、などに及び、そのことを前提として近代医学が急激に発達する。中国の医学においては、人間の内界と外界、身体と心、医者と患者などの間に「切断」がないのが、その特徴である。それは現代においては、近代

医学を補償するような地位を築きつつあるが、かつては、山田慶兒の論に示されているように、日本の学者が取り入れるのを拒んだ、あいまいな理論が⁽⁴⁾ オウコウしていた。

日本では、ガリレオ・ガリレイの宗教裁判などが単純に理解されすぎて、宗教と科学を対立的に把えすぎている。近代科学はキリスト教を母胎として生まれてきたことを、もっと明確に認識すべきである。他の文化圏から、それは生まれて来なかったのだ。

(中略)

このようにしてキリスト教から生まれてきた自然科学であったが、人間が多くの法則を発見し、自然を相当に自分の意のままにコントロールすることがわかってくるにつれ、言うならば X かのような勢いになってきた。村上陽一郎はこの現象を「聖俗革命」と名づけている。「一八世紀は、自然についての知識が、人間と神との関係において、いかなる位置を占めるか、という問そのものが次第に風化し、神が棚上げされ、知識論は人間と自然との関係のなかだけで問われるようになる、言い換えれば、神の真理ぬきの真理論、そして神の働きかけぬきの認識論が成立するようになる過程が進行していく時代であると考えられる」(村上陽一郎『近代科学と聖俗革命』新曜社)。村上は、この「聖俗革命」の特徴を「知識を共有する人間の側の世俗化」すなわち、「神の恩寵に照らされた人間だけが知識を担い得る、という原理から、すべての人間が等しく知識を担い得る原理への転換」ということと、「知識の位置づけのための文脈の転換」つまり「神―自然―人間という文脈から自然―人間という文脈の変化」という二点によって示している。

山田慶兒が本書のなかで言及している岩倉使節団の「見た」ヨーロッパの科学は、このような聖俗革命の成立後のそれであった。従って、科学を生み出してきたキリスト教をまったく抜きにして、山田の言う、日本人の「可視(可触)信仰」とうまくドッキングして、日本人が特に巧みに西洋の科学技術を取り入れることができたと考えられる。

西洋の科学技術に接しても、アヘン戦争以前の中国においては、儒教、道教、仏教などのキリスト教に対する⁽⁵⁾ユウイの確信が、科学技術を取り入れることに対する強い抵抗となった。それに対して、日本はそれらの宗教を中国から既に取り入れていながら、どこかにおいて日本的「可視信仰」を保持していたことは、山田慶兒の指摘するとおりである。そこへ聖俗革命を経た科学というよりは、日本的に受けとめると「科学技術」というものが入ってきたのである。それは日本人の傾向にすぐにマッチした。

このような経過を考えると、日本の科学者が山根一眞の言うように科学技術においては世界のトップ・レベルの水準にありながら、偉大な発明、発見が少ないという非難を受けるのも了解できる。つまり、日本人には、村上の言う「臆断」、すなわち思い切った理論

化の傾向が非常に少ないのである。たまにそのような傾向を持った者がいても、学問的良心の厳しい指導者によって、その芽を摘みとられがちである。日本では、このような「臆断」嫌いの学者が、一般の高い評価を受けている場合が多い。この点は、日本の今後の科学の発展を考えると、考慮しなくてはならぬことと思われる。

聖俗革命を経た後に、科学は二十世紀になって、また一段と変化を遂げる。それについては、本書所収の佐藤文隆の論に詳しく述べられている。そのなかで、佐藤が「身体的世界からの「離陸」という表現を用いているのは、注目すべきことである。

まず第一に、物理学の「身体的自然を超えた現象への突入」が問題となる。電波、電子、放射線など「目に見えない」ものが対象となってきた、このような対象を相手にしているとき、「身体に備わった危険回避行動や知恵やケンメイさは方向感覚を見失うようになった」。要するに、一般の人間にはまったく見当がつかない世界なのである。と言っても、コンピューターにしろ、テレビにしろ、日常生活においては多くの人が使用しているわけだから、これは大変なことである。人々は操作の方法のみをマスターするが、ほんとうは何が生じているのか、まるつきり不明の道具を使っているのである。それは本来的な意味で「マスター」しているとは言えないのだが。

Z

a しかし、身体の状態を知ろうとすれば、相当に知ることができる。解剖学的知識もあるし、今は多くの検査が発達して、自分の身体のはたらきがどの程度かを数量化して示すこともできる。

b このような事柄の平行として考えられるのは、人間が自分の身体を「自分のもの」として、それを思いのままに使っているのだが、実はその仕組みやはたらきについては何も知らないでいる、という事実があげられる。

c しかし、心と体が関連し合うような領域は、ブラック・ボックスである。客観的に測定し得る身体ではなく、自分が生きている身体というのは不可解な存在である。

d こんなことを考えると、人間がある一部のエリート以外は仕組のわからない道具を使うようになったことと、心身症の増加との間に、何か関連があるようにさえ感じられる。

科学技術の発達によって、人間生活が極めて便利になったことは事実である。そして、能率も非常に高くなった。しかし、この利便さや能率のために、ストレスという目に見えない代価を払っていないだろうか。(中略)

次に、現在の科学は宇宙的なひろがりにしる、原子内のミクロの世界にしる、人間の感覚的把握の範囲を超えてしまっているという事実がある。それに佐藤文隆が本書のなかで指摘しているように、現代の科学の成果について、一般の人間がほんとうに知るのには不可能に近い。われわれ一般の者は新聞による情報に頼って、「大発見」らしいと思うだけで、その内容については、時には想像することもできない。科学は人々の手から離れていった、と言わねばならない。

これらの点から言って、村上陽一郎の言う「聖俗革命」の次に、科学はまたひとつの革命というのが大げさであるとする、「離陸」を遂げたことができる。村上の「神—自然—人間—人間」という文脈から自然—人間—人間という文脈の変化」という表現を用いると、ここに新たに出てきた図式は、「科学者—自然—人間」とでも書くべきで、神の座を奪ったのは人間ではなく、特異な「科学者」という存在になってきた。このことは、偽科学と偽宗教の容易な結びつきが、現代において生じやすいことを示している。

ここで「科学者」が極めて特異で、神に近い存在であることを認めるのを拒否する人でも、先の図式で、科学者と人間とを区別したように、現代の科学が人間存在に相当に深いキレツを生ぜしめていることは認めるであろう。そのキレツは、人間がその「身体性」から切斷されている、ということである。科学は

Y

 妨げる。「身体性」の回復ということは、現代人に課せられた課題である。

(出典 河合隼雄『科学技術のゆくえ』より)

※出典の文章は一部を省略している。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア) 、(イ) 、(ウ) 、(エ) 、(オ)

- | | | | | | | |
|-----|---------|-----|-----|-----|-----|-----|
| (ア) | ア ン モ ク | ① 闇 | ② 安 | ③ 案 | ④ 按 | ⑤ 暗 |
| (イ) | オ ウ コ ウ | ① 往 | ② 応 | ③ 押 | ④ 横 | ⑤ 追 |
| (ウ) | ユ ウ イ | ① 有 | ② 勇 | ③ 優 | ④ 猶 | ⑤ 憂 |
| (エ) | ケ ン メイ | ① 賢 | ② 懸 | ③ 健 | ④ 謙 | ⑤ 顕 |
| (オ) | キ レ ツ | ① 既 | ② 亀 | ③ 奇 | ④ 軌 | ⑤ 機 |

問二 空欄

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

- ① 自然が宗教を飲み込む
- ② 人間が神の座を乗っ取る
- ③ 自然が神を駆逐する
- ④ 人間が自然を征服した
- ⑤ 人間が神に選ばれしものである

問三 空欄

Y

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

22

- ① 人間が信仰をもつのを
- ② 現代人が自然現象を理解することを
- ③ 人間が科学者となるのを
- ④ 現代人が偽科学を見破るのを
- ⑤ 人間が等身大の生き方をするのを

問四

傍線部A「たとえば物理学のようにひとつの「体系」にまとめる、あるいは、極めて普遍的で明快な法則によって説明する、という意志を持たなかった」ことこの理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

23

- ① 自然現象を理解する際に必要な、キリスト教の考え方をヨーロッパから来た宣教師に学んでいなかったから。
- ② 人びとが、「事実」のみから科学を構築しようとする姿勢をもっておらず、憶測によって自然現象を説明していたから。
- ③ 自然現象について、普遍的で明快な法則によって説明することについて、大きな意義を見出さなかったから。
- ④ 人びとが、この世界は単純にして明快な法則によって秩序だてられているという憶測をもたなかったから。
- ⑤ 人びとが、すべては神の意思であるとの考えに立って、自然現象についての探求を行わなかったから。

問五 傍線部B「現象とその現象を研究する観察者の間に明確な切断がある」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から

一つ選べ。解答番号は 24

- ① 自然法則を理解することで手に入れた技術と、それをを用いる人間の心とが明確に区別されているということ。
- ② 観察の対象となる自然現象を、観察者である人間の外にある物体として、切り離して捉えているということ。
- ③ 観察者である人間の対象としての身体と、人間以外の自然現象を完全に別のものと捉えるということ。
- ④ 患者の心的現象として現れる心と、医者 of 表面的な治療とが、一致していないということ。
- ⑤ 自然現象はすべて神の法則に貫かれており、人間には判断が及ばない部分があるということ。

問六 傍線部C「学問的良心の厳しい指導者」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 25

- ① 感覚的に捉えられるものが科学であるとすると「可視（可触）信仰」の指導者
- ② 科学は宗教とは対立するものであると排斥する指導者
- ③ 確実な根拠なしに推測により判断をすることを避ける指導者
- ④ 弟子が自分よりも秀でた研究をすることに對して、批判的な指導者
- ⑤ 学問とは時間をかけて部分的理解を積み上げていくものだと考える指導者

問七 本文 Z の中の a、b、c、d の文章を意味の通るように並べたものとして、最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 26

- ① b—a—c—d
- ② b—a—d—c
- ③ a—d—b—c
- ④ a—b—c—d
- ⑤ c—a—d—b

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 27

- ① 日本人が西洋の科学技術をたやすく取り入れることができたのは、科学を生み出してきたキリスト教に対する理解があったからである。
- ② 現代の科学は、神の恩寵に照らされた人間だけが知識を担い得る、という原理から、すべての人間が等しく知識を担い得る原理へと転換された。
- ③ 西洋の神父たちは、日本にキリスト教を伝導する際に、単純にして明快な法則によって秩序だてられている自然科学を武器にした。
- ④ 現代において、偽科学と偽宗教の容易な結びつきが生じやすいのは、科学者の倫理観が欠落しているからである。
- ⑤ 宗教と科学は対立するものであり、ヨーロッパにおいて近代科学が生まれたのは「聖俗革命」により、神の存在が否定されたからである。

問題はここで終わり